様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　24　年　4月2日現在

機関番号：３２６８６
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520286
研究課題名（和文）アメリカ南部文学におけるナショナル・ナラティヴの意義――近代日本文学との比較考察
研究課題名（英文）The Significance of National Narratives in the Literatures of the US South and Modern Japan
研究代表者
後藤　和彦（GOTO KAZUHIKO）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10205594

研究成果の概要（和文）：本研究は、19 世紀中葉における後発近代化を共有するアメリカ南部と近代日本において、「敗北の文化」に惹起され産出された公的文化言説、「ナショナル・ナラティヴ」が、その後に出現してきた私的言説としての文学にとってどのような意義をもったか、さまざまな文化テクストの実証的な分析によって歴史的に跡づけ、今後の両文学の本格的比較研究への新しい視座を切り開いた。

研究成果の概要（英文）：This study has traced the historical development from a “national narrative,” a public cultural discourse addressed in response to “the culture of defeat,” to a private discourse of literature, as found in the US South and modern Japan, both of which shared the historical fate of experiencing the belated modernization in the middle of the 19th century, by analyzing various types of cultural texts produced in the involved processes of their own peculiar “modernizations” in the aftermath of their cultural defeats, thereby to open up a new perspective with which to compare these two complex “modern” literatures.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2011 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：ヨーロッパ語系文学
科研費の分科・細目：文学　、英米・英語圏文学
キーワード：アメリカ南部、近代日本、ナショナリズム、「失われた大義」

１．研究開始当初の背景

（１）本研究の着想を得るにあたって影響のあったのは、1998 年から 1999 年にかけておこなった奨励研究（A）「アメリカ南部における表象文化史研究」（課題番号 10710237）および 2002 年単年の萌芽研究「文化の転轍について――アメリカ南部と近代日本における文学および文化表象の比較研究」（課題番号 14651086）である。前者においては、アメリカ合衆国にあって異端の歴程を歩んだ南部の文化表象の歴史的推移をたどり、主として南北戦争の勝者北部への劣等感からひねこびた、あるいはそれ故に複雑に屈折した内向的かつ頑迷な民族意識あるいはナショナリズムをこの土地が醸成してきたことを学び、後者にあっては、19 世紀中葉の南北戦争

に敗退し、所謂「再建」期間において、勝者北部流の民主主義観を強制されたアメリカ南部と、これとほぼ同時期にあたる江戸幕府瓦解という事態に引き続き、欧米列強国によってすでに選択されていた「国際公法」という世界基準を、例えば不平等条約締結という形で受け入れざるを得なかった近代明治日本を比較する際に、常に立ち返るべき視座としての「文化転轍」――この概念が本研究における「敗北の文化」という概念に発展的に昇華されていった――を、アメリカ南部と近代日本の文学を中心とする具体的な諸文化表象の特徴解析の一視点として得た。以上の研究の成果を受けて、さらに個々の具体的文化テクストを解析する方法の確立の必要を感じたことが、本研究開始の背景にはある。

（２）また私は本研究をナショナリズムと文学的想像力との関係を検討する総合的研究の系列につらなるものとしてその初動の一歩と位置づけたいと考えた。Benedict Anderson 以来、文学作品をナショナリズムの社会思想史的研究の重要な一素材とみなす傾向は顕著であるものの、またこの領域へ文学研究の領域から斬り込んでいった仕事に後述する亀井俊介に貴重な先例があるとはいえ、いまだ研究の発展拡充の余地は十二分に残されているとも考えた。

そもそもナショナリズムに直接的に動機づけられたテクストが研究対象として取り上げられることは、従来、必ずしも同テクストに内在する美的・文化的価値に依拠することなく、忌避される傾向があった。しかし、ナショナリズムにはそれ自体に旺盛な精神活動を推進する力が宿っていることは依然として否みがたく、たとえば文学のあり方について鼓吹しようとするような、それなりに「純粋な」精神のあり方についても従来のように社会学的・歴史学的見地からの批判的分析のみでは十分とは言えない。

したがって文化の敗北後の屈折したナショナリズム勃興期に現れる公的言説、ナショナル・ナラティヴを広く歴史、政治、宗教など文学以外の領野からも渉猟することで、ナショナリズムと文学に関する本格的研究の基盤を形成するべく、本研究へと踏み切ることとした。

２．研究の目的

本研究は、上述のごとく、後発近代化、すなわち「文化の敗北」という歴史的宿命を共有するアメリカ南部と日本近代において、独特な発展を遂げた近代文学の様相を明らかにすることを大目標としつつ、その確固たる基盤を形成するべく取り組まれた。したがって、外圧によって強いられ、独自の変形をこうむった彼等の、いわば対抗的近代化の過程で産み落とされていった公的言説、「ナショナル・ナラティヴ」が、いかにしてその後に発現する文学テクストへと昇華、変容、吸収されていったのか、このことが研究当初より最大の関心の対象であった。そこで文化再興の一環としてのナショナル・ナラティヴと、文学作品とのあいだに質的な差異があるとすれば、その差異とはいかなる差異か、またナショナル・ナラティヴがやがて文学へと瞠目すべき発展ないし深化を遂げるのだと理解するならば、それは具体的にいかなるプロセスを経るのか、これを明らかにすることをこの研究の第一の目的とした。

３．研究の方法

したがって本研究では研究拠点をアメリカ南部および日本、交互に移しつつ、互いのリサーチ結果を常に比較考量しながら行う必要があった。まず本研究におけるリサーチ方法の根底にあって、常々参照の対象としてきたのは、敗北という歴史的トラウマの時点から戦後文化の再構築に至るプロセスを分析した Wolfgang Schivelbusch の *The Culture of Defeat: On National Trauma, Mourning, and Recovery* (2001)である。本研究の記述においてしばしば使用してきた「敗北の文化」ないし「文化の敗北」とは、上記 Schivelbusch からの借用である。

（１）①さて、アメリカ南部にあっては「失われた大義」と称される一連のナショナル・ナラティヴに焦点をしぼって、アメリカ南部各所（たとえばノースキャロライナ州チャペル、ミシシッピ州オクスフォード、テネシー州ナッシュヴィルなど）に拠点をもつ南部文化および南部史研究所を定期的に訪問し、資料の調査・蒐集を行うとともに、現地の当該分野の研究者に研究の目的・方法などを共有することで新しい知見を得、加えて将来の共同研究の可能性について意見交換をおこなった。

②わが国にもノーベル文学賞受賞作家 William Faulkner 研究を始め南部文学研究には膨大な蓄積があり、当然のことながら本研究もこれらの達成を踏まえつつ行われねばならなかったのだが、本研究にあっては特に文学的土壌ないし風土形成にあずかった「失われた大義」ナショナル・ナラティヴの分析にかかわる先行研究に参照の焦点を絞り込むこととした。結果、本研究のリサーチモデルとして、アメリカ南部文学を歴史的に通覧した研究のうちから、南部文学史を、南部がアメリカにおける異端の地であるがゆえに到来したいくつかの危機を、南部文学者たちがおのおの歴史再編という手段で乗り越えていった過程としてとらえた、イギリス産の

文学研究者 Richard Gray の *Writing the South: Ideas of an American Region* (1986)、加えて南部ナショナル・ナラティヴ形成後に訪れた南部近代文学開花期、つまり「南部文芸復興」期に特化した研究からは、南北戦争を実際に戦った世代よりこの時期の文学的豊穣を担った世代に至る三世代の世代論を持ち込むことを通じ、戦争敗退から「文芸復興」期までに経過した 60 年という時間の解析にグラフィックかつ有機的な理解を提供した Richard H. King の *The Southern Renaissance: The Cultural Awakening of the American South, 1930-1955* (1982) を特に参照の対象とすることした。

（２）①一方、近代日本におけるアメリカ南部同様屈折したナショナル・ナラティヴについては、主として所属する立教大学内あるいは国内諸大学における文献調査および蒐集を行うことでデータベースの充実に努めたが、特に立教大学の日本文化研究所所属の教員とは緊密な連携をとり、本研究の研究目的や方法の妥当性等について助言を得つつ作業を進めた。

②日本近代文学については、日本近代 150 年間における、明治維新と称される最初の「文化の敗北」後のナショナル・ナラティヴとその後の文学形成との交渉を記述した亀井俊介『ナショナリズムの文学』(1988) が、本研究の着想にも影響を及ぼしたこともあり、重要なリサーチモデルを提供している。無論日本近代文化研究にも膨大な先行研究が存在しており、亀井ばかりでなく、たとえば近代文学誕生の経緯をたどった柄谷行人『日本近代文学の起源』(1980) や絓秀実『日本近代文学の〈誕生〉』(1995)、いわゆる「大戦」後の文学とナショナルな問題を論じた江藤淳『閉ざされた言語空間』(1989)、加藤典洋『敗戦後論』(1997) および『戦後的思考』(1999)、あるいは小熊英二『〈民主〉と〈愛国〉――戦後日本のナショナリズムと公共性』(2002) などはしばしば参考・援用しつつ作業をすすめることとした。ただし、いずれにしてもアメリカ南部文学との比較考察を行ったものは、皆無ではないものの、断片的な指摘が散見されるのみなので、これまでの南部文学研究の成果によって形成してきた研究モデルばかりでなく、本研究の最基底に存在する Schivelbusch の文献読解方法との相互陶冶を行ないつつ、牽強付会に陥らぬよう慎重に実践することを何よりも心掛けた。

４．研究成果

（１）本研究の成果としては、アメリカ南部および近代日本における屈折したナショナリズムの表出たるナショナル・ナラティヴの蒐集とその解析という作業そのものをまずは挙げねばならないだろう。このリサーチの蓄積は、今後、後発近代性を共有するアメリカ南部および近代日本の文学作品そのものの本格的比較研究を行う上で、貴重な資料となるだろう。

（２）上記のような資料の蓄積ばかりでなく、3 カ年の研究によって、アメリカ南部および近代日本の「敗北の文化」の所産として複雑に屈折した独特の「近代文学」(あるいは外圧としての近代化に対抗して生成された文学なので、「対抗近代文学」とも称することが可能だろう) に、ひとつの興味深い対照点を見いだしたことは、本研究の最大の成果であったと私は考えている。

つまり、ナショナリズムから産み落とされる公的な言説が、内向化して私的言説となるという推移は、後発近代文化圏にのみかかわる問題ではなく、文学の生成現場一般の現象であると思われるのだが、その内向化の過程、公的言説と私的言説の接続のあり方が、アメリカ南部と近代日本では著しく異なる。

南部文学の場合、「文化の敗北」によってこれまでの世界観が転倒してしまったグロテスクな戦後を生きてゆくのに、無論現状は冷静かつ知的な分析に耐えうるようなものではなく(W. J. Cash の *The Mind of the South* [1941] の一貫した南部批判の要諦に、南部人の知的分析能力の欠如という一項がある)、結果胡乱な文学を産出することになったのだが――そこまでは近代日本の事情にも当てはまるはずである――、しかし、南北戦争後の南部文学は、少なくとも 20 世紀の初頭の南部文芸復興期に至るまで、正視に耐えぬ現在を避けて泳いでゆく視線の先には、必ず消えた過去、消えたがゆえに美しい過去、理不尽な戦争によってついた夢の過去があった。20 世紀第 1 四半世紀期の文芸復興期に至り、H. L. Mencken らジャーナリストの南部反知性主義の徹底批判を受け、彼等の故郷の今が抱える問題を剔抉しようとする姿勢が現れてはくるのだが、それでもたとえばこの南部文学豊穣の時代を代表する Faulkner や Thomas Wolfe などの南部小説家たちはやはり彼等の過去へ、彼等の家族と土地の来歴へと弁明的ないしは告発的なまなざしを送るのが特徴だった。

ところが、日本の文学はそうならなかった。小林秀雄と並んで近代を代表する文芸評論家でもあり、かつまた小説家でもあった正宗白鳥は『自然主義盛衰史』(1948) において、日本近代文学の主流を形作った文学の潮流について特徴を以下のようにまとめている。箇条書き的に列挙すれば①事実「ありのまま」の偏重②想像力への不信③思想や宗教な

ど物語的構造をもつものへの不信、そして最後に④歴史への不信があった、と。明治末期の日露戦争および大逆事件という未曾有の混迷情況を受けて「時代閉塞の現状」をものした石川啄木は、日本の若き文学者が今の情況に対し若者らしき不満の身悶えをしてみせることもなく、「彼の観照論に於て実人生に対する態度を一決」してしまった点を批判しているが、この近代文学の担い手たちの「人生観照」への「態度一決」の結果、いわゆる「私小説」の日本文壇制覇という世界文学史上をみても類例のない事態が出来することとなった。これは本研究が取り組んできたナショナル・ナラティヴの文学への変容という観点から述べれば、公的言説から私的言説への極端な内向化、あるいはむしろ両者の断絶と呼ぶべき事態に根本要因があったことをうかがわせるのである。

本研究が最終的に析出したこの仮説の妥当性、その仮説にたった上で、アメリカ南部および日本独自の近代文学テクストが具体的にいかに解析されるか、これを本研究の後続研究とするべく、私はすでに「公的言説から文学テクストへ——アメリカ南部文学の自伝的作品と近代日本の私小説」と題し、科研費基盤研究（C）として申請中である。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　５　件）
① Kazuhiko GOTO, “Reading William Faulkner’s *As I Lay Dying* as a Poverty Narrative,” The Japanese Journal of American Studies, No.22, pp.109-124, The Japanese Association for American Studies 2011,査読あり。
②後藤和彦　「交差する〈南〉——マーク・トウェイン、ポー、そしてフォークナー」『マーク・トウェイン——研究と批評』第 9 号 pp.47-59、南雲堂 2010 年、査読あり。
③後藤和彦　「窯変・橋本治——告白」『大衆文化』第 4 号 pp.24-36、立教大学大衆文化研究センター2010 年、査読なし。
④Kazuhiko GOTO, “Cultures of Defeat, from Twain and Grady to Faulkner and Mishima,” *Mark Twain Studies*, Vol.3, pp.93-112, The Japan Mark Twain Society 2010,査読あり。
⑤後藤和彦　「フォークナー——敗亡の国、ナショナリズムと愛（下）」『フォークナー』第 11 号 pp.96-108、松柏社 2009 年、査読あり。

〔学会発表〕（計　１　件）
①後藤和彦　「W. J. Cash と志賀直哉——『野蛮な理想』と『原始的な慾情』」シンポジウム「反知性主義再考」講師、アメリカ学会第 45 回全国大会、東京大学、2011 年 6 月 11 日

〔図書〕（計　３　件）
①野田研一編『〈風景〉のアメリカ文化学』(分担執筆　後藤和彦「『場所の感覚』とグロテスクな風景——南部女性文学のためのノート」pp.83-104)、ミネルヴァ書房 2011 年、276pp.
②亀井俊介監修、後藤和彦他 7 名編集『マーク・トウェイン文学／文化事典』、彩流社 2010 年、482pp.
③田中久男監修、亀井俊介・平石貴樹編『アメリカ文学のニューフロンティア』（分担執筆　後藤和彦「孤独のインペラティヴ——カーソン・マッカラーズの文学」pp.200-222)、南雲堂 2009 年、360pp.

６．研究組織
(1)研究代表者
後藤和彦（GOTO KAZUHIKO）
立教大学・文学部・教授
研究者番号：10205594

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし